

## 社会へ繋げる「声のバトンリレー」

高志中等教育学校 一年 名古屋夏音

アニメ「めぐみ」。見終わった時に言葉を失つた私がいた。当時十三歳の横田めぐみさんは、私と同い年だった。学校生活、家族や友達とたわいもない会話をしたり、オシャレをしたりして、毎日幸せな日常を送っていたはずだった。なのに突然「拉致」という形で幸せな日常から引き離され、全て何もかもを奪われてしまつたことに衝撃を受けた。もし私だつたらどうだけの恐怖と苦しみを感じたことだろう。考えるだけで背筋が凍つた。そしてアニメに出て來ためぐみさんのご家族から言葉だけじゃ言い表せない深い悲しみと共に、「必ず取り戻す」という搖るがない信念を持つていたことがとても心に残つた。

このアニメをきっかけにめぐみさんことを調べるようになつた。父の滋さんは、全国各地で講演を行い、母の早紀江さんも兄弟の拓也さん哲也さんもめぐみさんに帰つてきてほしいという願いを胸に社会の中で声をあげ続けている。家族一体で厳しい社会の中で行動しているのだ。私はこのことにとって胸を打たれた。そして、私達はこのままでいいのかと。

私はめぐみさんを含めた拉致被害者救出に向けてどうしたらいいか考えた。そのために必要なのは、やはり何事も支える社会が必要だと思う。その社会を実現させるには、国民の関心を高めるのが一つだ。だから私は「声のバトンリレー」を大切にしたいと考えた。私が拉致問題や今の現状を家族や友達に話すこと。それを聞いた人は更に別の人たちに伝えること。このようにまるでリレーみたいに声が広がつていけば、国民の関心が高まるのと同時に、社会全体に拉致問題を解決せねばという思いが根付いてくる。そしてバトンリレーのすごいところは、誰にでも始められることだ。特別な立場にいなくても「知つてることを伝える」だけで参加できるのだ。そしてその一つ一つの声が集まることで、社会が行動し、政治や国際社会を動かす大きな原動力に繋がる。バトンが積み重なつていくことで、やがて大きな力を生み出すのだ。だから私は自分の声を止めずに次の人へ渡し続けたいと思う。

私の声はまだ小さいがその声がやがて大きくなつて、被害者家族、社会へ届くことを願つていて。そしてそのような社会を具現化させ、めぐみさんをはじめとする全ての拉致被害者が家族のもとへ一刻も早く帰れる日が来るよう、私はこれからもリレーを続けていきたい。